

## 柿衛文庫所蔵の俳人書簡——越人——

辻村尚子

### 要旨

本稿は、公益財団法人柿衛文庫が所蔵する越人書簡の全文を翻刻し、若干の考察を加えるものである。尾張蕉門を代表する俳人の一人である越人は、芭蕉在世時には『春の日』『猿蓑』等の蕉門俳書に入集するほか、芭蕉の更科紀行の旅に同行するなど、芭蕉に親炙し、蕉門俳人としての地位を築いたことが知られる人物である。芭蕉の没後、一時俳壇から離れた時期もあったが、正徳期に復帰を遂げ、享保末年に至るまで蕉門俳人として活動を続けた。

柿衛文庫が所蔵する書簡は、いずれも越人の俳壇復帰後、享保期のものと考えられ、編著の編集過程や門人への対応等、越人晩年の俳諧活動の具体をうかがう上で貴重な資料である。

キーワード…越人、蕉門、書簡、柿衛文庫

公益財団法人柿衛文庫が所蔵する俳人書簡の中から、蕉門俳人越人の書簡を紹介する。

蕉門俳人の書簡研究においては、蕉門俳人（一部蕉門以外を含む）七十一名の書簡三百十通を収録する飯田正一編『蕉門俳人書簡集』（昭和四十七年、桜楓社）が基本文献である。同書以後、個々の俳人研究や地方俳壇研究についての報告もあるが、伝存資料の乏しさもあり、芭蕉書簡研究の蓄積と充実に比べれば、研究の遅れている分野である。

柿衛文庫の資料は、創設者岡田利兵衛（雅号・柿衛。明治二十五（昭和五十七年）が収集したコレクションを核とする。伊丹に江戸時代から続く酒造家の第二二代当主であり、伊丹町長・伊丹市長を歴任した岡田利兵衛には、俳文学者としての一面もあった。郷土伊丹の俳人鬼貫から始まった俳諧研究は室町連歌から近代俳句にまで及び、著書『芭蕉の筆蹟』（昭和四十三年、春秋社）では文部大臣賞を受賞、芭蕉筆蹟研究の第一人者でもある。そのコレクションの特色は、学術研究を目的として収集された資料という点にある。蕉門俳人書簡についても然りで、研究価値の高い資料が集められているが、芭蕉に比べ、展観される機会が少なく、未公開のまま収蔵されている資料が多い。本稿では、そうした資料の中から、越人の書簡を紹介する。

越人（明暦二（元年説も）享保末年）は、尾張蕉門を代表する俳人の一人である。芭蕉への入門は、「野ざらし紀行」（貞享元年）の旅で芭蕉が名古屋を訪れた折とされている。「春の日」（貞享三年）に初入集を果たし、貞享四年には芭蕉とともに三河国伊良古崎に隠棲中の杜国を訪問、翌年は芭蕉の「更科紀行」にも同行し、芭蕉と親交を深めた。『あら野』（元禄二年）、『猿蓑』（元禄四年）に入集するほか、『ひさご』（元禄三年）では序を寄せており、尾張蕉門の主要作者として活躍した。芭蕉没後、俳壇の表舞台から姿を消し、一時消息不明となったが、正徳期に俳壇復帰を果たし、以後、享保期の晩年に至るまで蕉門俳人として活動を続けた<sup>1)</sup>。

越人の書簡は、『蕉門俳人書簡集』に収録される十三通のほか、名古屋博物館所蔵の問景宛七通（『愛知県史資料編20 近世6 学芸』平成二十四年、愛知県に翻刻）が知られている。柿衛文庫には次の十二通を所蔵する。

- 1 問景宛 六月十七日付
- 2 問景宛 六月二十九日付
- 3 問景宛 七月四日付
- 4 問景宛 七月五日付
- 5 問景宛 十五日付

- 6 問景宛 九月十五日付
- 7 問景宛 九月二十五日付
- 8 問景宛 十月十六日付
- 9 問景宛 十二月二十三日付
- 10 志厚宛 六月十七日付
- 11 石杖宛 七月十二日付
- 12 門左衛門宛 九月六日付
- 便宜上、問景宛（1～9）とその他宛（10～12）に分けた。いずれも俳壇復帰後、正徳から享保期の書簡と思われる。この時期、越人は『鶴尾冠』（享保二年）に始まり、『みつのかほ』（享保十一年）、『庭竈集』（享保十三年）、『猫の耳』（享保十四年）と続けて撰集を刊行しており、晩年に至るまで精力的に活動を続けたことが確認できる。書簡の大部分は、この時期の越人門の主要作者であった問景に宛てたもので、門人交流の具体をうかがい得る資料として注目される。また、越人の筆蹟資料としても研究に貢献するものである。
- 十二通のうち、1・2については、拙稿「俳壇復帰後の越人―問景宛書簡二通の紹介と考察―」<sup>(2)</sup>に、5は「越人筆問景あて書簡―『庭竈集』の編集―」<sup>(3)</sup>において取り上げた。本稿では、残る九通の書簡について報告する。なお、3・4・6・7・8について

ては、注3稿に一部引用したが、今回改めて全文を紹介する。また、10は、『蕉門俳人書簡集』に『思文閣古書資料第十八号附録』（昭和三十四年）掲載写真図版により既に紹介されるものであるが、原簡により同書の翻刻を改めることができる箇所があるため、これも改めて紹介する。

【翻字・解説方針】

【書誌】 【翻字】 【解説】 から成る。【書誌】には書簡の形態・数量・本紙寸法を記す。【翻字】は、原文に忠実であることを旨としたが、通読の便を考慮して、漢字は原則として通行の字体を用い、句読点・濁点を施した。虫損・破損等による判読不能の箇所は□（一字）・「」（二字以上）で示した。尚々書は二字下げで記した。【解説】には年次推定の根拠と、内容の要点を記した。

- 1 問景宛 六月十七日付
- 2 問景宛 六月二十九日付
- 1・2は辻村尚子「俳壇復帰後の越人―問景宛書簡二通の紹介と考察―」（注2）に掲載
- 3 問景宛 七月四日付

【書誌】

紙本墨書一紙。本紙二三・九×三三・三糶。

【翻字】

一昨日者扱々御馳走忝奉存候。

今日ハはやく可参奉存候。再昨日ハ

身うそ寒ク、少頭痛も仕、熱も

御座候。大かたはやり候瘡か、又ハ風引候

ニて可有奉存候間、ふくわんきん、正気散

被下候ハ、能可有と奉存候。乍御六かし、

急ニ追出し候御葉二三帖御合せ被遊

可被下候。只今夕被下昼比ニ飛泉へ参上

可仕候。左程之事ニてハ無御座候へ共、

ケ様之賊早く申候よく御座候間

申上候。心事後刻貴面。以上

七月四日

問景公

玉几下

越人

【解説】

一昨日のご馳走の礼状。実はその前日から、越人は寒気・頭痛・発熱と体調不良であつたらしく、「ふくわんきん（不換金）・正気散」（いずれも風邪薬）の調合を問景に依頼している。「こんな賊は早く狩りとしてしまいたい」と諧諔を交えている点、問景

との親交のほどがうかがえる。問景の伝は殆どわかっていないが、本書簡から葉種商であつたか、とも想像される。書簡中に登場する飛泉は、越人が『俳諧冬の日權花翁之抄』を与えた神戸飛泉のことである。尾張の名門神戸氏の三代目たることを囑望されていたが、享保八年、二十七歳の若さで世を去つた。小出侗斎に儒学を学び、越人には享保初年入門したという（石田元季『冬の日』越人註）『俳文学論考』昭和十九年、養徳社）。飛泉の没年から、書簡の年次は享保初年から八年以前と推定される。

〔柿衛文庫翻刻123号〕

4 問景宛 七月五日付

【書誌】

紙本墨書一紙。本紙二四・〇×三九・〇糶。

【翻字】

「」御手前ニも御心すぐれず

「」ニ近比わりなき儀申上候。以上

昨日者終日得尊意大望之至、もはや

此上ニハ不可過奉存候。殊ニ御気色も

御すぐれ不被為遊候ニ、別而ハ亭主、

扱者愚老珍重之御事ニ奉存候。

一、私之儀何とやら瘡くさき事<sup>ニ</sup>

御座候。きのふハ罷有候間殊之外熱<sup>ニ</sup>て、

帰宅仕候ても其通、御葉を夜中

被下、今朝ハ脈も静<sup>ニ</sup>心よく罷成候。

併腹之味、頭之様子など、いまだ其名残

有様<sup>ニ</sup>御座候。可然被遊候ハ、御葉御

調合被遊可被下候。大方御影<sup>ニ</sup>而よく罷成

可申奉存候。心事拝顔と。

早々以上

七月五日

捧天<sup>草食野服</sup> 井中窺天越人

□<sup>博</sup>文神武礼楽用節三巴問景皇々帝々

【解説】

昨日の面会に対する礼状。一つ書きの越人体調不良の記事から、3 問景宛七月四日付と一連の書簡である可能性が考えられる。その場合、年次は、3と同じく享保初年〜享保八年となる。

本書簡のうち、戯名を用いた越人署名と問景宛名の部分が、宮本三郎「越智越人」（前掲注1）に「ユーモラスな手紙」として取り上げられている（ただし、宮本氏は越人署名を「草食野服井中窮、天越人」と読む）。〔柿衛文庫翻刻124号〕

※著者の意向により画像は公開しておりません

5 問景宛 十五日付

辻村尚子「越人筆問景あて書簡―『庭竈集』の編集―」(注3)に掲載

6 問景宛 九月十五日付

【書誌】

紙本墨書一紙。本紙二七・六×三九・五糎。

【翻字】

「一」夜ハ御馳走と申、深更と申、段々毎度集之儀<sup>ニ</sup>付可申上様も無御座奉存候。

御礼<sup>ニ</sup>参上可仕御事<sup>ニ</sup>候得共、毎度之御事、

大親ハ不有親と申候が実<sup>ニ</sup>て御座候。ちよと

仕たる事にハ礼<sup>ニ</sup>早々参候<sup>ニ</sup>、毎度く

大キ成御真切ゆへ返而御無沙汰申上候。

此比<sup>ニ</sup>拝顔<sup>ニ</sup>可申上候。神社考御返しと

申上候。久々留置忝存候。又入鹿が最期

何月<sup>ニ</sup>御座候哉。夏の様<sup>ニ</sup>覚申候が、王代一覽にて

御覽被置可被下候。心事近日と。早々以上

尚々忝奉存候。もはや後集は本町

□い<sup>ハ</sup>いかい半分<sup>ニ</sup>仕候。觚哉子とか「<sup>ハ</sup>ねば

ならぬと被申候。

□れ一ツ如何と私も案じ事<sup>ニ</sup>御座候。以上

九月十五日

公

問景公

人々御中

越人

【解説】

ご馳走と「集之儀」の礼状。この「集」は『庭竈集』のことと  
考えられることから、年次を享保十三年とする。蘇我入鹿の最期  
につき、『日本王代一覽』での確認を依頼する一文がその根拠と  
なる。『庭竈集』上巻巻頭「聖君」部には其角発句「天智天皇／  
蘇我入鹿国家を乱らんとせしに／うち治む入鹿が首に四海波」が  
入集する。この其角句には季語がない。このように季語を持たな  
い発句について、越人は『庭竈集』上巻末尾に、「されば発句の  
うちに、季なしなどいふ人も有なむ。しかれども其一段は古人の  
式にしたがひ侍りぬ。待賢門の軍、頼朝大仏供養など、皆其時の  
季を持事也。」と述べている。書簡の依頼は、蘇我入鹿が亡くなっ  
た六月十二日を季(夏季)とするための確認作業であったと考え  
られる。また、書簡では『本朝神社考』の返却に言及する。享保  
十三年五月十日付問景宛書簡(『蕉門俳人書簡集』所収)に「王  
代一覽」を問景に返却し、『本朝神社考』の借用を所望する記事

がある。「久々留置忝存候」とあることからすると、五月に借用した書をようやく返却したものである。なお、『日本王代一覽』は林鶯峰が著した日本通史で、『本朝神社考』は林羅山が儒学の排仏主義の立場から著した神社研究の書である。

尚々書によれば、「後集」について觚哉子から意見があった模様である。飯田正一氏は、享保十三年九月二十三日付問景宛越人書簡にある「前集」の語について、「越人の集で続けて刊行されたのは、『庭竈集』と『猫の耳』（享保一四）以外にない」ことから、『庭竈集』を前集、『猫の耳』を後集とする。妥当な見解と思われるが、「後集」が『庭竈集』下巻を指す可能性についても検討の余地を残しておきたい。『庭竈集』は上巻に故事等を題とする発句、下巻に四季発句と連句を収録する。そして、觚哉は『庭竈集』上巻に発句一、下巻に発句三と歌仙一（「懐旧」連衆、越人・機石・芝響・觚哉）が入集する。一方、『猫の耳』では発句一の入集を見るのみである。「もはや…」以下の文を、「もはや下巻は本町連衆の連句が半分できたところですよ。觚哉がなんとかせねばならぬと言っています。」といった意で解することも可能である。一案として示しておく。

〔柿衛文庫翻刻125号〕

7 問景宛 九月二十五日付

【書誌】

紙本墨書一紙。本紙一五・九×四二・三厘。

【翻字】

先日者緩々「  
」

然者其節申上候通「  
」

弥々御出可被下候。長者町へ

参候筈<sup>二</sup>仕置候。扱ハ御句等之

思召共も尽明日ハ埒明可申候。

御隙等入候御事も御座可

有奉存候へ共、乍自由今日

之内<sup>二</sup>御隙御約被置、明日ハ

朝食上り候ハ、御出被遊候様<sup>二</sup>

被遊可被下候。とかく集の儀ハ

簀笠、貴公様の御影<sup>二</sup>て

無御座候へバ、埒明不申候。御存

知之通、外之衆中<sup>二</sup>句之談□

等仕る人も無御座候。大キ成

御苦勞<sup>二</sup>御座候へ共、四日市を

御乗出しと被思召、偏<sup>二</sup>く

御たすけ可被下候。心事

明日拝顔。以上

尚々 簀笠子へも其段

申遣候。以上

九月廿五日

ふ

〔四〕カ  
□景公  
人々御中

越人

【解説】

問景に「集」の相談をするべく、明日の来訪を願う書簡。越人・問景・簀笠（『冬の日』連衆の一人、材木商重五の子）の三人での会合の心積りであったようである。

問景と簀笠は、越人の編んだ『鵲尾冠』、『三つのかほ』、『庭竈集』、『猫の耳』の全てに参加しており、書簡にいう「集」がいずれであるのか、本書簡の内容からは決め得ないが、『庭竈集』の編集に関わる、6 月十五日付問景宛等と一連のものとして見て、年次を享保十三年としておく。書簡に越人は、「句の相談がでる人は他にいない」と述べており、撰集の編集において、問景と簀笠を頼りにしていたことがうかがえる。

〔柿衛文庫翻刻126号〕

8 問景宛 十月十六日付

【書誌】

紙本墨書一紙。本紙二三・七×二四・二厘。

【翻字】

先日以来御物遠ニ奉存候。弥御そく才ニ

御座被成候哉。扱ハ御取込之中ニ御座候へ共、

前集もはや校合本斗ニ罷成候間、

何とぞ乍御苦勞簀笠子ニハ毎度御会合

被仰合、出来仕候様ニ奉頼上存候。巾下

辺合ハ、もはや京令本下り候哉など申候。

編<sup>ママ(編)</sup>く<sup>ニ</sup>御両所之御苦勞之上ニ罷成候間

奉頼存候。心事貴面。頓首再拜

十月十六日

ふ

〔四〕カ  
□景公  
玉九下

越人

【解説】

「前集」が校正段階に入ったので、簀笠と会合を持ち、出版に向けて努めてほしいと依頼する手紙。「巾下」（現在の名古屋市区の一帯）からも刊行の問い合わせがある、とあり、いよいよ出版時期が近づき、編集作業が大詰めに入ってきたことがうかがえ



る。「前集」については、6 九月十五日付問景宛の解説参照。『庭  
竈集』に関わる一連の書簡と見て、年次を享保十三年とする。『庭  
竈集』の刊記には「享保涇灘歲孟冬甲子之日」とあり、江戸須原  
茂兵衛、京都河南四郎右衛門、名古屋木村理兵衛の版元の名が並  
ぶ。刊行月については、『俳文学大辞典 普及版』（平成二十年、  
角川学芸出版）に「孟冬」より十月の出版とする。ただし、享保  
十三年の「甲子之日」は十一月十八日。書簡からうかがえる進捗  
状況を考え合わせると、実際には、十一月の刊行となったか、不  
詳。

〔柿衛文庫翻刻127号〕

9 問景宛 十二月二十三日付

【書誌】

紙本墨書一紙。本紙一六・〇×六七・〇糎。

【翻字】

昨日者御手帖、殊<sup>ニ</sup>以

御酒一樽被掛尊意、扱々

忝奉存候。罷出候間御報も

不申上候。先以御父子様

共<sup>ニ</sup>御勇健珍重日出度、

野老無異儀罷有候。如

尊意当年と申上候も最早

無余日罷成申候。別而

其辺ハ御事繁多<sup>ニ</sup>御座可

被成奉存候。緩々得御意候

儀ハ年内ハ御座有間敷

奉存候。来春可申上候。

其内私儀年頭之御礼

<sup>ニ</sup>八十年以来出不申候

間、其段も慮外御免

可被下候。御尊父様へも乍慮外

申上候由奉頼上存候。

心事来陽可

申上と。早々以上

尚々御深志之儀共

忝奉存候。又月並料之儀

仰被下候。私もしかと覚候ハ無御ざ候。

宿之者共申候ハ五六度程之

様<sup>ニ</sup>覚申候よし申候。其内

相違も可有御座候間、能比<sup>ニ</sup>御覚之通

<sup>ニ</sup>可被成候。以上

十二月廿三日

分

〔間カ〕  
景公  
尊答

越人

【解説】

問景から歳暮に酒一樽が贈られたのに対する礼状。歳末の礼として、紙面をゆったりと使い、丁寧に認めている。年次は不明。尚々書では問景から問い合わせのあった月並料について、回数記憶が確かではないので、問景に任せる由、記している。大儀義雄氏が紹介された十二月二十七日付の問景宛越人書簡は、歳末の御祝儀の礼状で、問景が撰集の出版費用と見られる二両を立て替えたことが記される<sup>(4)</sup>。問景が経済的に豊かな人物であったことが知られる。  
〔柿衛文庫翻刻128号〕

10 志厚宛 六月十七日付

【書誌】

紙本墨書軸装一幅。本紙一四・八×五〇・一糎。

【翻字】

昨日者御手帖ニ御座候へ共、  
うどん奉加ニ昼前分出候て  
夜九つ比ニ帰宅故、御報も

不申上候。貴公様津嶋ニて

心太ニ御腹中味御不快之由、

結句悪水流の夕立にて

御養生ニハ天下ニ一事ニ

奉存候。それハ当分之儀、

御無事ニ而津嶋迄此大暑ニ

行幸之御はり、目出度奉存候。

野夫も当春相煩候大病

後ハ、ちよこく茶碗屋之

地震にて欠申候て、殊之外

草伏<sup>マツ(伏)</sup>申候。世ニ居候儀、間も

なき年ニ候へ共、後生之

たくはへ露程も無御座候間、

今更迷惑仕候。そこらニ若

御願ひ置之屑ニても候ハゞ、

少づ、可被下候。余リ我等ハ願ひ

無御座候。ケ様申が、まだ欲の

皮ニ御座候。蒔ぬ種の荒畑

持人の木綿粟稗取時ニ、

俄ニ其部ニハ交まじく候。

ゑのころ草、蚊屋釣草之  
ぬしと見へおかし。

以上

六月十七日 越人

志厚公  
實報

【解説】

志厚の体調不良見舞いと自身の近況について、ユーモアを交えて綴る。志厚は越人の撰集では『猫の耳』（享保十四年）に初めて名が見える。晩年の門人。詳しい伝はわからない。なお、本書簡は『蕉門俳人書簡集』に『思文閣古書資料第十八号附録』（昭和三十四年）所収写真に拠り載るものである。書簡年次については、飯田氏が「晩年のものである」とするよう、志厚との関わりから晩年の書簡と見ておく。  
〔柿衛文庫翻刻129号〕

---

※著者の意向により画像は公開しておりません

10 志厚宛 六月十七日付

11 石杖宛 七月十二日付

【書誌】

紙本墨書一紙。本紙二四・〇×一八・八糎。

【翻字】

貴札拝見。弥御無事日出度、

料之儀、是<sup>ニ</sup>てハ多ク御座候へども、

とかく受取置、過ハ重而之御事<sup>ニ</sup>

可仕候。折節病人も御座候間早々

<sup>ニ</sup>申上候。金子壹歩預り置申候。

以上

七月十二日

カ

石杖公

貴報  
「越人」カ

【解説】

金子一步の請取状。「料」とのみあり、歳旦帳料(歳旦帳の入  
句料)、点巻料(俳諧巻の加点料)、集料(撰集への入集料)のい  
ずれかが考えられる。七月という時期から歳旦帳料とは考え難  
く、また、宛名の石杖の名を享保期の越人撰集に見出すことがで  
きないことから、点巻料とするのが妥当であろう。相場より多額  
であったため、次回の点巻料として預かっておきましょう、と返

信する。書簡には、越人宅に病人のあったことも記され注目され

るが、詳細はわからない。書簡の年次は不明。筆蹟と料紙が他の  
書簡と共通することから、享保期の書簡と見ておく。

〔柿衛文庫翻刻130号〕

12 門左衛門宛 九月六日付

【書誌】

紙本墨書軸装一幅。本紙二三・五×三四・〇糎。

【翻字】

此間者御物遠<sup>ニ</sup>奉存候。弥

御無事<sup>ニ</sup>御座被成候哉。御見廻

も不申上御無沙汰仕候。仍而

此葺只今もらひ申候。

乍<sup>マ</sup>微<sup>マ</sup>少<sup>マ</sup>送<sup>マ</sup>りしんじ申上候。

其内貴面<sup>ニ</sup>可申上と。早々以上

尚々御息処<sup>ニ</sup>可得御意候へ共

此間ハ御物遠<sup>ニ</sup>奉存候。以上

九月六日 越人

門左衛門様

【解説】

ご無沙汰の挨拶とともに、茸をお裾分けする。宛名の門左衛門については不明。筆蹟から享保期の書簡と見ておく。

〔柿衛文庫翻刻1331号〕

注

- (1) 越人の評伝については、宮本三郎「越智越人」(『蕉風俳諧論考』昭和四十九年、笠間書院)に詳しい。
- (2) 「俳文学報」第五十六号、二〇二二年十月
- (3) 「俳文学報」第五十一号、二〇一七年十月
- (4) 大磯義雄「越人書簡問景宛新出二通」。初出「国語国文学報」昭和四十四年三月。『芭蕉と蕉門俳人』平成九年、八木書店所収。同書簡は『蕉門俳人書簡集』にも収録されている。

\*本稿は、JSPS科研費JP21K20002の助成を受けたものである。